

身近だな、税って

同志社香里中学校3年
梶川 友

突然だが、私の祖父母の家は幼児院だ。父が地域の学校へ通ったその家から、今また、子どもたちが毎日通学し、社会へと巣立っている。しかし、そこは父たち四人家族が住んでいたごく普通の二階建て住宅だ。実は、最後の転勤地に現在も住んでいる祖父母は、空き家対策を兼ねて自宅を貸していたが、縁があって幼児院に使用してもらうことになったそうだ。私はこのことを知っていたが、あの大きさの家がなぜ幼児院として使用できているのかという疑問を持ったままだった。

そこで、その幼児院のホームページを見た。すると、次のことがわかった。約十年前に小グループケアが導入されたこと。三才から高校生までが生活していること。社会福祉法人の運営で、社会保障関連の税金が使われていること。その地域の一軒家として、地域住民との関わりや、民生委員、学校長等の支援があること。

以上のことからさらに関心が高まり、調べてみると、小グループケアとは、本院との交流を保ちながら地域にとけ込んで、できるだけ家庭的な環境の下で「あたりまえ」の生活を保障していくことを目的としているとあった。例えば、食事作りの手伝い、買い物、近所の公園で遊ぶ、習い事に通う、地域の行事に参加する等、私たちと少しも変わらない生活が実現できていることがよくわかった。六年前の台風で屋根に被害があり、父が現状確認をしに行く時、私はただついて行った。すると、その家の人たちは、私と全く同じ様に「ふつう」に暮らしていた。今、振り返ると、ああ、これがグループホームの良さだなと実感できた。従来の大人数の施設から小規模化を推進する時期に、祖父母の家がこの条件にぴったりあてはまったのであった。私の疑問がとけたと同時に、役に立ててよかったなという気持ちが芽生えてきた。

次に、この事業へ社会保障関連の税が使われていることに注目した。すると、この税は国の予算歳出のトップで、全体の三十三%も占めていることがわかり、びっくりした。特に、福祉事業と深い関わりのあるこの税は、教育の分野で私たち中学生とも密接につながっていて、私の毎日の学校生活も支えられていることを知った。なかでも、祖父母の家に税が投入されて、子どもたちの生活が大きく変わったこと、子どもたちの個性が発揮される場が確保できたことに税の有効活用を身近に感じとれた私であった。そして、この事業に私たち家族も関わっていることにちょっぴり誇らしさをも感じることができた。

将来、私が社会人となった時、納税の義務はもちろん、その税が有効に活用されているかということもしっかり見届けていかなければならないと思った。更に、納税者として協力できることがあれば、祖父母のように少しでも実行していける大人になりたい。